



Title	<書評>面矢慎介著『近代家庭機器のデザイン史 — イギリス・アメリカ・日本』
Author(s)	谷本, 尚子
Citation	デザイン理論. 2021, 77, p. 92-93
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/78329">https://doi.org/10.18910/78329</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 【書 評】

面矢慎介著『近代家庭機器のデザイン史——イギリス・アメリカ・日本』  
美学出版合同会社 2020年5月20日発行 総279頁

谷本 尚子 京都精華大学

本書の目的は、英国・日本・米国の家庭用品を取り上げて、社会的経済的要因が製品進化に及ぼした影響関係を描き出す試みである。その対象は、ケトル、魔法瓶、鍋、コーヒーマーカー、小型調理家電、掃除機、風呂。このように著者は、一見バラバラな家庭用品を取り上げ、その地域ごとに異なる変容を追いかける。著者は次のようにいう。

……抽象的な「文化的差異」から出発することはせず……各製品の発展過程の違いを、経済・社会条件の違いから、できる限り説明する……。  
(序章, p.9)

第1章から第5章までは事例研究であり、製品進化を分析し、第6章では家庭機器の近代化とは何かについて考察している。以下各章の内容について、紹介したい。

## 第1章 電気ケトルと魔法瓶

イギリスの紅茶を楽しむ習慣は、電気ケトルの圧倒的な普及率と関連する。著者は事例研究の最初にイギリスの電気ケトルを取り上げている。著者によれば、電気ケトルの外観デザインの変化には、耐熱性プラスチックの登場と、喫茶の習慣の変化との、2つの要因があるという。「1980年代になっての、耐熱プラスチックボディのジャグ型の出現は、素材転換による製造の効率化と紅茶をあまり飲まない大陸各地への市場拡大が意図されていたが、……紅茶愛飲の習慣がもはや絶対的なものでなくなっていたことが指摘できる。(p.32)」

イギリスの電気ケトルと比較されるのは、日本

の魔法瓶（電気魔法瓶）である。ここでは日本で製造された保温ポットの役割をはたす様々な製品を取り上げて、考察している。そして、外観デザインの変化や性能、製造技術といった視点からの分析ではなく、なぜか1960年代の「花柄」ブームに注目している。「しかし総じて、魔法瓶の初期の花柄は、描画および描かれた花の種類とともに日本の伝統意匠というより「西洋風」の絵柄だった。……大衆的な欧米への憧れ（想像上の異国としての欧米）を率直に表現したものだ」と考えられる。(pp.51-52)」

第1章で著者は、消費者嗜好の変化の文化的差異を考察している。

## 第2章 鍋

鍋の文化的差異をどの様に論じるのか。

イギリスの鍋については、調理用レンジの形状が鍋の形を変えてきたことを指摘し、素材による変化が一段落した後は、料理法の変化や家庭生活における台所の位置づけといった社会・生活の様相を反映している事例を観察している。

これに対して日本の鍋のデザイン変化については、鍋の製造会社が金属加工業者の領域で発展した経緯を明らかにし、日本独自の薄手のアルミ鍋の登場により、鍋が消耗品となったと指摘している。さらに様々な料理を本格的に再現するための専用鍋が作られたこと、引き出物とされたことなどを論じた上で、イギリスと日本の鍋は、「産業の構造的変化と、日常的な調理習慣・料理法の変化との両方をきわめてよく反映 (p.96)」しているという。この章では、産業構造の変化についての考

察が興味深かった。

### 第3章 調理家電

第3章第1節ではアメリカのコーヒー抽出器具について、抽出方法に地域差があることや電化に伴う外観デザインについて考察している。これに対して第2節で論じられたのは、アメリカの小型調理家電が豊かさを示すものであり、ちょっとしたもてなしの場で用いられた社交習慣と関連付けられるものであるという指摘である (p.132)。これらの生活機器が、生活の合理化のためだけに作られてきたのではなく、むしろ心の豊かさのために進化してきた側面に著者は注目している。

### 第4章 真空掃除機

第4章では掃除機を取り上げ、イギリスと日本の住空間の変化と生活機器との関わりについて論じている。著者は真空掃除機を事例として選んだ理由に、イギリスと日本のその基本形状が異なること、その理由が機器の発展プロセス自体の違いにあることを、そしてメーカーの市場戦略の違いにあると論じている (p.143)。他の生活機器に比べて、日本では真空掃除機が長い間定着しなかった理由など、興味深い考察が多い章であった。

### 第5章 風呂

第5章では、イギリスと日本の風呂の機器進化について考察している。「入浴習慣・動作の基本的な違いに由来する直火炊き系(日本)と給湯系(イギリス)という技術発展系譜の違いはありながら……共通するいくつかの社会・経済的要因(pp.215-216)」を見出している。風呂は、ガスなどのインフラや戦後の住宅の更新などに影響を受けながらも、生活習慣の根強い継承が見られる点、本書での論考に相応しい生活機器であった。

### 第6章 家庭機器のモダナイゼーションとは

第6章は本書の論点を明文化していると同時に、家庭、市場、産業の構造を整理し、それぞれの視

点から機器の普及について分析している。著者は「……「家庭の産業化」という社会的プロセスは、家庭機器を受容する側(家庭)と、家庭機器を供給する側(産業)とが、ともに変化してくるようなプロセスだったと言えるだろう (p.230)」という。この章では、家庭機器の導入及び普及には、〈産業-市場-家庭〉の関係とエネルギー供給の問題、さらには住宅のあり方が影響している事などが論じられた。

### コラムについて

本書のもう一つの魅力がコラムである。一つ目は、イギリスのミルン・ミュージアム。現在は無いようだが、電力供給会社によって設立され、電気機械・器具のコレクションで有名だった。二つ目は、アメリカのヘンリー・フォード博物館とスミソニアンのアメリカ歴史館を取り上げている。ヘンリー・フォード博物館は、エジソンの発明を初め、アメリカ生まれの産業技術史博物館である。アメリカ歴史館には1970年代以降の歴史観・技術史観が反映されていると、著者はいう。三つ目はイギリスのジェフリー・ミュージアムである。この博物館では特定の時代を再現した部屋が展示されており、当時の社会状況と流行のイメージの考察を交えて展示されている点に着目している。「イギリスでは、社会史的視点を取り入れることによって、デザイン史の見直しが進められている。(P.181)」

コラムでは博物館を訪れた時の率直な感想が述べられており、溢れんばかりの道具に囲まれた著者の熱が伝わってくる。

本書は、初学者にも判りやすいだけで無く、デザインを研究する上で、何に注意しなければならないか、どの様に論じるのかを反省するきっかけを与えてくれる良書である。